No.163
2010.
11.30

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-3941 関市小屋名
（岐阜県百年公園内）
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

市町村立博物館のこれからについて

岐阜市歴史博物館　館長　黒田　隆志

この4月に岐阜市歴史博物館の館長を拝命したばかりの新米館長です。

6月9日の全国博物館長会議（主催:文部科学省、財団法人日本博物館協会）と、7月7日～9日の博物館長研修（主催:文部科学省）に参加しました。そのなかで、地域と博物館に関するものが3コマ組み込まれていました。前者においては事例発表「地域づくりのための博物館の役割」、後者においてはパネルディスカッション「地域に開かれた博物館」と研究協議「博物館と地域振興」です。会議・研修の対象が館長であることと、主催団体から考えるとこれからの博物館の進むべき方向を示唆するものといえます。

本館は岐阜市教育委員会の社会教育施設として「市民の教育、学術及び文化の発展に寄与するため」（岐阜市歴史博物館条例）に設置され、その目的を達成するため地域の「学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術または文化に関する諸施設と協力すること」（岐阜市歴史博物館条例施行規則）になっています。開館以来25年、この方針のもと、学校との関係を重視しながら他の諸機関とも連携してきました。

これは、全国の市町村立博物館で通常行われていることですが、今、あらためて取り上げられたのはそれなりの理由があると思われます。

一つは、この不況下に生き残りを模索する地域の動きです。2008年9月15日のアメリカ第4位の証券会社リーマン・ブラザーズの経営破綻を機に生じた経済不況が全世界を呑み込みました。日本の場合、それ以前からの不況に重なったため、全国の自治体の財政は一層苦しくなりました。また、「地方分権」「地域主権」の考え方により、国と自治体の責任のあり方や中央集権的な国と自治体の関係の改変（上下関係から対等な関係へ）が進められてきました。このことは全国の自治体に対して、財政的な自立も強く促すものでした。

こうした時代の制約と要請を受け、全国の自治体は地域づくりに取り組んでいます。その時、新たな資金調達を必要としない、あるいは少なく済ます方法として、既設の博物館に目が向けられることは至極当然のことです。アサヒビール芸術文化財団事務局長の加藤種男さんの考え方を使わせていただくと、博物館には資源（資料）、場所（土地・建物）、専門家（学芸員）、予算（少ないながらお金[a]）があるからです。

二つには、博物館の抱えている事情があります。全国の博物館数は2008年度に5,775館を数え、1987年度と比べておよそ2.5倍にもなりました。一方、入館者数はあまり伸びていません。そのため一館当りの入館者数は、1986年度の9万4700人から2007年度の4万8500人へとほぼ半減してしまいました。これは一見したところ、博物館間で入館者の取り合いをしたようにも見えますが、もしそうだとしたら、もっと入館者が増えていたと思います。博物館の新しい入館者を取り込もうとする努力が足りなかったのではないかと、24年間博物館に勤務している者として反省しているところです。

博物館には、資料の収集・保存、調査・研究という大きな使命があります。これは所与の条件でありますが、博物館は利用していただいてはじめて認知されることも事実です。そして認められない博物館の運命は容易に想像できます。このような厳しい状況下にある博物館は、地域との関係を深め、地域の支持を得ながら活動を進めていくことが今まで以上に求められていると思います。

a.（　）内は黒田記入。

平成22年度岐阜県博物館協会通常総会報告

期　日：平成22年5月21日（金）
会　場：岐阜県博物館　ハイビジョンホール
参加者：104名（委任状含む）

平成22年度岐阜県博物館協会通常総会が平成22年5月21日午後1時15分から岐阜県博物館ハイビジョンホールで開催されました。

（若宮会長の挨拶）

始めに若宮会長から「来年は協会設立45周年を迎える。今後も様々な活動を通し地域文化の向上に皆さんとともに貢献していきたい。」などの挨拶の後、来賓を代表して、岐阜県教育委員会　教育次長　林俊彦様よりご祝辞を頂きました。

（祝辞を述べる林教育次長）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【林教育次長の祝辞要旨】

昨今の博物館を取り巻く環境は「博物館冬の時代」と言われるほど厳しいが、こうした中にあって博物館関係者には、社会的使命をどう果たしていくかが問われている。岐阜県博物館協会においては、研修会、公開講座、地域博物館活性化支援事業等により今日的課題に即した取り組みが多く見られる。博物館施設はまさしく「ふるさとの宝物」の宝庫であり、岐阜県の進める「ふるさと教育」の推進に以前にも増してお力添え願いたい。本総会の成功と協会の皆様の一層のご活躍を祈念する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

続いて、定足数の報告（出席者数46名、委任状58名）の後、議事に移りました。

議事は「議題1号　平成21年度事業報告（案）及び収支決算（案）の承認」、「議題2号　平成22年度事業計画（案）及び収支予算（案）の決定」、「議題3号　役員の改選」についてであり、いずれも原案のとおり承認されました。

平成22年度の主な事業は公開講座の開催、研修･研究会の開催、機関紙の発行、地域活性化支援事業等となっています。特に今年度は地域活性化支援事業で岐阜県の歴史･文化に深い関わりを持つ白山文化について、その情報発信事業が予定されています。

平成21年度に助成金を頂いたのは次の4団体でした。

田口福寿会	50万円
十六銀行	50万円
大垣共立銀行	50万円
岐阜信用金庫	30万円

（事務局長　井上幸治）

協会新役員のご紹介

本年度は役員改選の年度です。次の通り承認されました。

任期は平成22年4月1日～24年3月31日までです。

役　職	氏　名	所　属
名誉会長	土野　　守	高山市長
会　　長	若宮　多門	若宮修古館
副 会 長	名和　哲夫	名和昆虫博物館
	古川　秀昭	岐阜県美術館
	*石田　　克	岐阜県博物館
	榎本　　徹	岐阜県現代陶芸美術館
	西永　勝己	高山市郷土館
専務理事	井上　幸治	岐阜県博物館
理事(岐阜)	*黒田　隆志	岐阜市歴史博物館
	永縄　厚雄	内藤記念くすり博物館
	堀　由紀子	岐阜県世界淡水魚園水族館
	川口　直人	岐阜市科学館
(西濃)	片野　知二	片野記念館
	高橋　宏之	揖斐川歴史民俗資料館
	伊藤　　一	海津市歴史民俗資料館
	*安田　信幸	関ヶ原町歴史民俗資料館
	*三輪　　寛	大垣市四館総括責任者
(中濃)	*辻　　幸子	美濃和紙の里会館
	可児　光生	美濃加茂市民ミュージアム
	金子　徳彦	古今伝授の里フィールドミュージアム
	林　　良治	可児郷土歴史館
(東濃)	*須藤　茂美	瑞浪市化石博物館
	小栗　幸江	美濃歌舞伎博物館相生座他
	*丹羽　利幸	中津川市鉱物博物館他
	*林　　順一	土岐市美濃陶磁歴史館
	平林　典三	日本大正村
理事(飛騨)	川上　裕惟	下呂発温泉博物館
	谷田　　勉	高山祭屋台会館
	加藤　郁乎	光記念館
	*石田　　克	岐阜県ミュージアムひだ
	谷端　敏明	飛騨古川まつり会館
	森　勇喜雄	白川郷野外博物館合掌造り民家園
監　　事	齋藤　仁司	齋藤美術館
	高井　孝純	かかみがはら航空宇宙科学博物館
	日比野安平	岐阜県先端科学技術体験センター
顧　　問	吉田　幸平	岐阜市（ICOM特認顧問）
	宮崎　　惇	笠松町
事務局長	井上　幸治	岐阜県博物館
事務局員(会計)	山田　美樹	岐阜県博物館

＊印＝新任

○専門委員会

機関紙ホームページ委員会		
委 員 長	*石田　　克	岐阜県博物館
副委員長	*浦崎　太郎	岐阜県博物館
研修・研究委員会		
委 員 長	榎本　　徹	岐阜県現代陶芸美術館
副委員長	渡部　誠一	岐阜県現代陶芸美術館
公開講座委員会		
委 員 長	古川　秀昭	岐阜県美術館
副委員長	*谷口　輝己	岐阜県美術館
地域博物館活性化委員会		
委 員 長	若宮　多門	若宮修古館
副委員長	永縄　厚雄	内藤記念くすり博物館

＊印＝新任

第121回岐阜県博物館協会公開講座報告
「親子体験教室」（古墳模型・勾玉・火鉢）

期　日：平成21年7月26日～12月6日（全4回）
会　場：大垣市歴史民俗資料館
講　師：堤正樹、堤昌之、資料館職員

大垣市歴史民俗資料館では、親子体験教室を開催しています。この講座は、歴史文化を親子で実感してもらおうと企画したものです。

「古墳模型づくり」は、史跡昼飯大塚古墳の600分の1の縮尺模型を、段ボール紙を積み重ねた上に紙粘土を被せ、埴輪･茸石を飾って仕上げます。立体感のある作品づくりを通して、古墳の知識理解も深まります。

「勾玉づくり」は、磨き上げた作品を親子で見せ合い、帰りにはアクセサリーとして身につけたりプレゼント用に包んだりして、とても人気のある教室です。

「火鉢で温まろう」は、地域の産出の火打石で点火し炭火を起こしてお餅を焼くなど、昔の生活体験をしました。孫に語りかける祖父母の姿は喜々として輝いており、世代間での語り伝えの意義も大きいものでした。

（大垣市歴史民俗資料館　長澤　均）

第122回岐阜県博物館協会公開講座報告

期　日：平成22年8月8日（日）
会　場：サイエンスワールド
参加者：44名

残暑が厳しい8月8日、第122回岐阜県博物館協会公開講座が瑞浪市のサイエンスワールドで開催されました。

講座の内容は、親子が一緒に紙でロケットを作り実際に打ち上げるというものです。講師は、植松電気という一企業の取締役でありながら、大学と共同でロケットの研究を進めている植松努先生です。参加者は、小学生から中学生の子供達です。最初に先生が、夢があればなんでもできるという内容で講演をされました。先生の話に子供以上に親が熱心にメモをとりながら聞いていたのが印象的でした。講演の後、実際に紙でロケットを作成したのですが、先生の紙を切る手さばきに大人も子供も目を輝かせていました。

親子で一緒に参加でき、作品を作り遊ぶことができるという非常に楽しい企画でした。

（㈶土岐市埋蔵文化財センター　中嶌　茂）

第72回岐阜県博物館協会会員研修会

テーマ：美術館照明の基礎と実践
期　日：平成22年1月22日（金）13：00～
会　場：岐阜県現代陶芸美術館
参加者：40名

博物館・美術館の展示や館内の雰囲気づくりの向上に「照明」を欠かすことはできません。そこで、テーマパークや博物館の照明デザインを長年プロデュースされてきた藤原　工氏（パナソニック電工㈱）をお招きし、研修会を開催しました。前半は基礎知識の習得をめざし、光による損傷や照度指標、色温度と見学者の心理・生理的な印象、反射グレア(映り込み)など多岐にわたる講義となりました。後半は、グループに分かれ、絵画や陶芸作品などを実際に展示しながら、ライティング実習を行いました。最新のLED照明に関するお話などもあり、現場で必要となる実践的な技術を学ぶ貴重な機会となりました。

第73回岐阜県博物館協会会員研修会

期　日：平成22年3月19日（金）13：30～
会　場：岐阜県博物館
参加者：20名

日常のめまぐるしい博物館業務をふりかえったり、問題・悩みなどを共有できるような初の試みとして、研究発表会が開催されました。「また来てみたい、行ってみたい感動のある博物館をめざして」（伊藤恭子／内藤記念くすり博物館）、「地域のミュージアムができること」（藤村　俊／美濃加茂市民ミュージアム）、「ジュニアキュレイター」（山口敦子／岐阜県現代陶芸美術館）の3者から、教育普及に関する発表がありました。終了後は、発表者や参加者との交流会もあり、つながりを深める場となりました。

第74回岐阜県博物館協会会員研修会

テーマ：ミュージアムと保存
期　日：平成22年6月11日（金）13：00～
会　場：長良川国際会議場　国際会議室
参加者：24名（岐阜県加盟館分）

一般社団法人・文化財保存修復学会の大会が、東海地方では初めてとなる岐阜で開催されるのにあわせ、学会及び愛知、三重、岐阜の三県の博物館協会とが共催する形での研修会となりました。

テーマは《ミュージアムと保存～身近なことから、ところから～》。「（ミュージアムは）日々資料や作品を扱い、その保存管理に苦慮しているわけですが、近年、その活動の諸条件はますます厳しいものになっています。このような状況下で重要な資料や文化財をまもってゆくには、文化財の保存に関わる者すべてが、まずお互いの状況を理解し合い、相互に協力し合う努力をし始める必要があるのではないでしょうか。」（開催趣旨より）という問題意識から会が開催されました。

会では博物館明治村の西尾雅敏氏から明治村の取り組みについての講演がおこなわれ、その後、事例報告とディスカッションがおこなわれました。愛知県陶磁資料館・田村哲、愛知県美術館・長屋菜津子、名古屋ボストン美術館・井口智子の3氏から、様々な問題に対し知恵とアイデアで解決の努力をしているその一端を発表していただきました。

今回の研修会にあたり、保存現場の状況や、職員が抱える問題を把握するため、三県の協会加盟館に呼びかけ合同アンケートが実施されました。学芸員133名から回答が寄せられ、その報告がおこなわれました。それぞれの館やスタッフは保存業務体制が不十分と認識しつつも、経費や人出不足などの要因で、問題を簡単には解決できない厳しい現場に直面している実態が明らかにされました。

館種や規模、スタッフや予算の面など状況が違っていても、保存に対しての共通の課題を参加者は共有し、まさに「身近なことやところから」行えることは何かある、そんな手掛かりを感じることができる有意義な会になったと思います。

（美濃加茂市民ミュージアム　可児光生）

平成22年度東海地区博物館連絡協議会・日本博物館協会東海支部総会に出席して

日　時：平成22年7月16日（金）
会　場：横浜情報文化センター
参　加：静岡、愛知、山梨、神奈川、岐阜の5県から52名（本県からは7名）

東海地区博物館連絡協議会の会場は、神奈川県の横浜情報文化センターです。

横浜情報文化センターは、新聞･放送の二大メディアによって運営･一般公開される日本新聞博物館（ニュースパーク）と放送ライブラリーを中心に情報関連産業オフィス、ホール、会議室、店舗、パブリックスペースなどからなる複合施設です。市民に開かれた親しみのある施設であり、メディア･情報関連産業の拠点でもあります。

開会に当たり、東海地区博物館連絡協議会会長神奈川県立歴史博物館　西川館長よりご挨拶を頂きました。また、来賓祝辞として、日本博物館協会　河上専務理事と神奈川県教育委員会生涯学習部　木島部長に頂きました。

次に議題として平成22年の理事と監事の選任、平成21年度事業報告･決算報告、平成22年事業計画･予算案が決議されました。また、来年度の開催県として、岐阜県が担当県であり、若宮会長がご挨拶されました。さらに日本博物館協会の主要事業につき河上専務理事よりご説明がありました。

講演会は横浜開港資料館館長高村直助先生より「横浜開港150周年事業をふりかえる」と題して約1時間講演をして頂きました。

高村先生は、歴史学者･東京大学名誉教授で、ご専門は日本近代経済史･産業史になります。横浜市三度目の市史編集事業になる『横浜市史Ⅱ』の代表編集委員を務め、加えて横浜市歴史博物館館長も務めております。

概要としては財団法人横浜市ふるさと歴史財団が行った横浜開港150年記念の事業についてです。この事業には、横浜市歴史博物館、横浜市三殿台考古館、横浜都市発展記念館、横浜開港資料館、横浜ユーラシア文化会館の企画展示、講演会、シンポジウム、講座、バスツアー、コンサートなどの特別イベントなど多岐にわたり開催されました。

『これまで、この5館はすべて「指定管理者制度」を受けております。この150周年記念事業もこれまでの長年の調査研究の蓄積でできたものです。日ごろの調査研究活動がいかに重要であり、そして積み重ねが大切です。』と述べられました。

最後に日本新聞博物館を一同で観覧させて頂きました。新聞博物館は日刊新聞発祥の地である横浜市に2000年10月にオープンしました。常設展示では、新聞の歴史や新聞がつくられるまでをご紹介するほか、企画展示室ではテーマに沿った展示を行っています。このほか、パソコンで新聞の製作体験ができる「新聞製作工房」や全国の主要紙を閲覧できる「新聞ライブラリー」も併設されています。また、新聞博物館がある横浜情報文化センターの8階には、放送番組を収集･保存して一般にも公開している「放送ライブラリー」が入居しているほか、近隣には横浜開港資料館をはじめとして多くの資料館･博物館があります。

美術館、博物館はお互いに情報交換や作品交換等を積極的に行うことが大切であり、また、このような博物館関係の会議にできる限り、参加させて頂くことが重要と思われました。

（光記念館　吉井隆雄）